

重症患者ほど 笑顔少なくて

神経の難病「パーキンソン病」の重症度と笑顔の度合いに相関関係があることが、国立病院機構徳島病院(吉野川市鴨島町敷地)の研究で分かった。患者の表情を分析したところ、「笑顔度」は健常者の半分以下で、リハビリによる症状改善後には笑顔度も向上した。研究結果は病氣治療の新たな指標になるとして、18日に名古屋市中で開かれる日本神経学会で発表する。

パーキンソン病

目尻が下がったり口角が上がったりする笑顔の特徴を、専用ソフトを使って測定。パーキンソン病患者55人と健常者25人の作り笑顔や会話中の表情を測って「笑顔度」を分析した。その結果、健常者の笑顔度は、作り笑顔が平均55・3%、会話が同20%だったのに対し、同病患者はそれぞれ平均16・7%、同7・5%と大きく下回った。5週間の入院中にリハ

徳島病院 相関関係を指摘

パーキンソン病 脳内で神経伝達物質のドーパミンが不足し、手足の震えや動作が緩慢になる症状が徐々に進行する病氣。10万人に150~200人の割合で発病するといわれ、県内の患者は1千人以上とされる。

ビリを受け、運動機能が改善した患者19人の笑顔度も測定。リハビリ前に平均6・7%だった作り笑顔は、リハビリ後に同10・2%に上昇し、会話中も平均4・2%から同6・6%にアップした。神経内科の三ツ井貴夫医師によると、研究結果から笑顔度は患者の運動機能と心理状態の両面を反映する指標になり、新たな治療方法の開発につながるという。三ツ井医師は「気分が

笑顔度を測定する患者(左)―吉野川市鴨島町の徳島病院



沈めば病氣が悪くなる。家庭や地域社会でも患者が笑顔になるよう支援する。(秋月悠)